外部の目から見た学校という組織
～働き方改革で大事なこと～

善積　康子 氏

三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング株式会社
主席研究員

（プロフィール）
福祉や教育、地域のコミュニティの再生、事業化などの分野において、社会の変化・改革のありようを踏まえた政策研究など、幅広い分野を専門とする。
地方公共団体の教頭・副校長研修、教職員研修等の業務改善について多数の公演実績あり。
また、文部科学省の学校における働き方改革特別部会の委員も務めた。

働き方改革。この言葉は、30年以上働いている私の会社でも必要なワードでした。入社時、某栄養ドリンクのCMごとく、まさに24時間働けますか、という価値観をなんとなく前提にしている空気がありました。日中に調査や顧客訪問・事務処理を行い、夕方から「さて、自分の仕事をしよう」という仕事のスタイルの先輩もいて、「私はこうならないぞ」と心に誓ったことを思い出します。

今は、そうしたスタイルは幸い当社にはありません。社員も増えてそれぞれの人生の過ごし方を選んでいます。そうした社員は貴重な人材でもあるわけで、定着し質の高い仕事が出来るように会社は環境を整えてきてくれたと思います。

ただそれは、自己流、勝手連ではなく、ルールを守ることや限られた時間の中で仕事を回すことが社員にも求められるということであり、競争社会のなかで仕事を得られるよう、質の高い仕事を限られた時間の中で生み出す力を研究員が持つことでもあります。

～　働き方改革支援アドバイザーからのメッセージをお届けします　～

　仕事量は創業期と比べものにならないほど増えており、どうやって対応するか、次々と社会から求められる新たな課題、新しいテーマをどう自分のものとするか、研究員一人一人がまさに四苦八苦してきました。今、私は学校現場に行くなかでデジャブ感がとてもあります。私どもが経験してきたことで、参考にして頂けることがあれば御提供したいと考えながら皆さんの仕事を拝見しています。

　現場を見せて頂き、教職員の仕事はとても大変な仕事と心底から感じています。一つは成長期の、すんなりといかないことも多い子どもが相手であること、教える内容が時に応じて変わり教職員も多くを学ばねばならないこと、保護者という味方であり時に厳しく見守る存在がいること・・。加えて、実は職場を同じくする教職員同士が、仕事を効率よく円滑に進められない課題を作り出してしまっている実態があるのです。

　多くの学校で、業務遂行の効率性を下げている要素として、「執務環境の乱雑さ、使い勝手の悪さ」「ICTが使いにくい、苦手、機器等のスペック不足」「情報を共有財産として使えていない」「会議運営に課題がある」「引き継ぎなどができていない」「探し回りが多い」「行事や校務分掌の見直しが進まない」などがありますが、みなさんはもうお気づきだと思いますが、これらのことを変えていこうとすると、関わる人の理解と協力が必要不可欠なのです。

　私どもは、ご支援をさせていただく際にアンケート調査を行います。その中の項目には次のようなものがあります。「職場ではみんなで意見を出し合ったり、助け合ったりしていると思いますか。」「職場の雰囲気はよいと思われますか。」「職場では、誰でも自由に意見や考えを述べることができますか。」これらは、職場のチーム力を確認するものです。どんな変革を行うにせよ、日ごろ感じている課題や意見、提案を正直に話し、誠実に受け止めて考え、実現に向けて一緒に取り組むということが出来れば、働き方は改革できます。逆はストッパーになってしまうのです。

～　働き方改革支援アドバイザーからのメッセージをお届けします　～

　学校という小人数の組織で、人間関係に軋轢が生じると大変なことになります。それは教職員を精神的に追い込み、子どもに十分向き合えなくなる背景にもなります。また教職員のなり手不足という課題がありますが、これから職を見つける若い人が職場に求める要素は、安定した収入はもちろんですが、人間関係の良さやプライベートも大事に出来ることという調査結果があります。そうした観点からも、魅力のある職場としてチーム力が大事と言うことは御理解頂けるかと思います。

　そしてこれを組織の中にインプットできるかどうかは、リーダーの考え、ふるまいが大きく影響します。是非、皆さんの思いを、忖度無くざっくばらんに話し合う場を一度持ってみてください。どんな学校としたいのか、課題を感じていることが何か、どう変えていきたいのか・・。話し合える時間をつくり、教職員のアイデアを尊重し、応援する姿勢を見せるリーダーの存在は大きいものです。働き方改革は、前提を持ちすぎず、教職員の主体性を活かすプロセスを持つことで実効性を高めることが出来ます。「働き方改革には教職員の意識改革が重要」といいますが、そのためにも働き方改革を自分事として受け止めていくプロセスを取り入れてみましょう。

　働き方改革を実行することは実はしんどいことでもあります。これまで慣例的にしてきたことを変えるわけですから誰しも抵抗があるものです。ただ子どもや保護者、社会、学校に期待される役割・指導内容など様々なことが変化していく中で、量も増え、精神的な負担感も多く、新しく覚えていくことも増えている中で、何かを減らし、また効率化させていくことは必要不可欠です。どの教職員も心のゆとりを持って仕事に携われるよう、どうか前向きに“改善”について考え取り組んでみてください。